



薄暗い資料室、
転入生の女の子と2人きりな
なった俺は、若い欲望を
抑えきれなかった

そ、それは……

基本18枚
本編162枚!

あま
出る出る

転入生が
大人しそうだったので
飼うことにしました。

が
チャ

こころ……って
お庭……ですよねっ

制作：aegistone
イラスト：禽竜(きんりゅう)

その日の朝は少し違った。

「突然ですが転入生を紹介します。」



転入生か、こんな時期に珍しいな。
俺は机に突っ伏した頭をあげ、教卓の
ほうを見上げると、そこには黒髪の
少女が立っていた。

校則どおりの髪にシンプルな髪留め。
見るからに大人しそうな女の子だった。

は、はじめまして
吉川 優香といます

あの、よ、…
よろしく願います

その子はかなり緊張しながら
自己紹介を済ませたようだった。



『キーンコーンコーンコーン』
4限終了の鐘が鳴り昼放課になると、
クラスの女子たちは転入生の吉川に
群がっていた。



前の学校のこととか、趣味とか、好きな
テレビ番組とか……。彼女はとても戸惑い
なくだらない質問に答えている様子だった。
ながらもなんとか答えている様子だった。

放課後にそれは起こった。

「おいお前、ちよっと頼まれてくれないか」

帰り支度を済ませ、帰ろうとする俺に教師が話しかけてきた。

「どうやら彼女、吉川を、転入に関する資料がある『資料室』まで案内してほしいとのことだった。」

正直なところ面倒ではあったが、帰宅部で暇なことがバレている俺はしぶしぶその依頼を引き受けることになった。

「資料室は別館だから、まあついて来て」

「あ、はい、お願いします」

コツ、コツ、コツ……
別館までの道中、彼女との会話はなく、人気のない廊下に2人の足音だけが響いていた。

しばらくそんな気まずい雰囲気歩き、やっと別館の資料室に着いた。

「資料室、ここな。」
「あ、ありがとうございます。」

俺たちは薄暗い資料室に入り、奥へと進んだ。

資料室は入学シーズンは人の出入りが多くなるが、今はもうあまり使われない時期でメンテナンスが行き届いていないらしく、蛍光灯がつかなくなっていた。

「えっと、確か先生の言っていた棚は……お、あった。」
指示された番号の棚へと手を伸ばす。

……。しまった。手が、届かない……。

自分の背が低いというわけではないが、
この学校の資料室は少し狭い。そのぶん棚の高さを
上げて補っているのだ。

しかし、男たるもの、高いところに手が届かないのを
女の子に見られるのは恥ずかしいものだ。
会話のない気まずさも気になっていたので、
俺はなにか、彼女へのごまかしの言葉をさがす。

「届かねーな、ハハハ……。俺が吉川を肩車すれば
届くかもな」

照れ隠しの冗談のつもりだった。初対面の相手に
するには微妙だったかと彼女のほうを「瞥すると……

「わかりました。」

え……。まじでか……？

彼女が俺の方へと近づいて来る。まさか、本気にした？
様子を見るに、ノリツツヨミなんてこともないだろう。

ふと俺は思う。この子は人見知りっぽいし、
見るからに大人しそうな子だ。
きつと、言わたことを断れないタイプなんだろう。

冗談だよ、と言いかけたときに、ふと、彼女の
ふとももが目に映る。年頃の女の子の肉付きのいい
足……。肩車なんてすれば、あれが俺の顔に……。

俺はそんな欲望に負け、しゃがみこんで彼女に
肩を差し出した。

彼女が俺の頭をまたいで肩に乗った。
その瞬間俺は息を飲んだ。

やわらかい2つの肉の感触が俺を挟みこむ。
すべすべもっちりとした肌は、蒸れたソックスの
熱……



やはり彼女は俺に対して
緊張しているらしく、その肌はしっとり
汗で湿っており、俺の肌に吸い付いてくる。

はあ、たまらん。。。しかし、ずっとこの感触を
楽しんでるわけにはいかない。俺はぐいっと頭を
上げ、立ち上がる。

勢い良く立ち上がったってしまったせいか、彼女の足が
俺の肩をすり下がった。その瞬間。。。。



「ふにっ」
首筋に、柔らかい感触を感じた。
スカートの中のやわらかい布の感触。。。
パンツだ。パンツが首筋に当たってるんだ。

俺はその感触に意識を集中する。
俺は姿勢を整えるようなふりをして、首筋を
パンツに擦り付ける。

すりすり、すりすり……

そして、ある感触をとらえた。
くたくた。
それはパンツの奥の、大事なところ……。その
割れ目が、首の骨をかくく挟むような感触だった。

その瞬間、俺の理性は吹き飛んだ。



俺は彼女にばれるのも気にせず首筋を
その感触に擦り付けまくる。

くたくた。

初対面の同級生のパンツ……



しばらくその感触を楽しんでいると、
変化が現れた……パンツが湿り気を帯び始めたのだ。

さすがに彼女も俺がこの感触を楽しんでいることに
気付いてるだろう。この湿り気が汗なのか、それとも……
俺の興奮は高まり続けた。



あの、資料、
とれました……

それからしばらくその濡れたパンツの
感触を楽しんでいたが、彼女の一言で我に返った。

大人しい彼女のふりしぼったようなかすれた
その一言は、彼女から俺への抵抗だったのだから。

俺は無言のまま彼女を床へ下ろした。

彼女を下ろすためにその足を支える。
ふにふに。しっとり吸い付くような感触。。。
先ほどまで自分を挟んでいた気持ちいい感触が、
手だによりハッキリわかる。

あの…

ふに

ふに

彼女は少し抵抗するような素振りを
見せるが、俺の頭はもう
彼女をもっと感じたいということだ
いっぱいになっていた。



俺はいさり勃った肉棒を
彼女の尻の谷間に擦り付けながら、
脅しの言葉をかけた。

乱暴にされたくなかったら
大人しくしろよ……。

……!

それを聞き、震えたし、怯える様子の彼女に
これ以上の抵抗はされないことを確信した。
ズボンのチャックを下ろし、性器を取り出す。



腰を突き出し、肉棒を太ももの間に挿入すると、パンツから染みだすヌルヌルと太ももの汗で滑って、肉棒全体を刺激される。



腰を前後するたびにパンツの少しザラついた感触と肌の感触を感じ……それだけで射精できそうだった。

もっと直接感じたい。。。
完全に暴走した俺は彼女のパンツをずり下ろす。
俺に怯えきった彼女はされるがまだまだ。

これが本物のマ○コ。。。しかも初対面の、同級生の。。。。



処理されていない生えかけの陰毛と
びっちりと閉じた肉穴は、
彼女の経験の無さを表していた。

この穴で気持ちよくなりたい。。。。

もっともっと。。。。

我慢できなくなった俺はまたそこに腰を突き出した。重厚な肉の感触を直接亀頭に感じる。

やだ...
これ、おちん●ん
あたっちゃんって...

腰を突き出すたびにかるくワレメがおし拡がり、膣の肉ヒダが亀頭からみつぎにゆちにゆちといやらしい音をたてる。



奥まで押し込めば勃起したクリトリスが
ヨリヨリとチ○コの先端を刺激する。
シヨリシヨリとした生えかけの陰毛からの
刺激も心地がいい。



引き抜こうとすればクリトリスが
カリ首にひっかかることでまた違う
刺激を感じ、射精感がぐんぐんと高まる。

そして彼女の吐息が荒くなったことに気づき、
興奮はさらに別次元へと跳ね上がった。

俺は床に手をつかせて
腰をその顔に突き出した。

く、口でしてくれよ……
それで解放するから……

やりますから……
もう帰らせてください

指示を聞いた彼女は困惑したが、
俺への畏怖が勝つたようだ。
指示通り、彼女は俺の肉棒をくわえる。



彼女は控えめな舌づかいで、ちゅばちゅばと俺の肉棒を刺激する。



柔らかく、暖かい感覚が亀頭に広がる。ぎこちなさは目立つが、唾液がじわじわと溢れローションがわりになり、肉棒へとまとわりついた。

その背徳感に、俺の腰も
勝手にぐいぐいと動き出す。



だが経験が無いのであろう、彼女の
上手とは言えないフェラチオは、
俺の理性を奪った。

俺は彼女を軽く突き飛ばし腰を突き出させる。彼女はまだ少し抵抗する素振りを見せたが、もう遅い。

待って！
い、嫌っ……！

ぐいっ

ぷふ

セックス、初対面の女の子と……。俺は肉穴の入り口を亀頭の先端で探り、いっきに奥へと突き出す。



ぴゅちりと閉じた肉壁を亀頭でおし拡げる。
そのたび、ウネウネと肉ヒダがからみつき、
チ○コを絞りあげる。

いい痛い……っ

やはり経験は無かったようで、
太ももに滴る鮮血がより俺の加虐心を
煽った。





最後まで入ると、チ○コ全体が暖かく気持ちいい肉壁に包まれ、さらに絞り上げられる。

俺は子宮口へ亀頭をおしつけるように彼女の腕を引っ張ると、キュンキュンとマ○コが締め付けてきてよりチ○コを刺激される。





はあ...
気持ちよすぎるっ

もう許して...

ビクッ

ビクッ

ヌ
ッ
ッ





それからもう無心に腰を振りまくった。
彼女の肉をえぐるように、チ○コをちらちらとを
擦りあげる。



マ○ヨ、マ○ヨ、マ○ヨ……！
もはや俺の頭は、そこで気持ちよくなることしか
考えられなくなっていた。
そして、ついに射精感も限界に達した。



射精したい……このマ○ヨの中で……
後先のこととも考えずに必死に腰を打ち付ける。



そっ
それだけは……!!

ああっもうっ
出るっ……!!





俺は腰をびったりと押し付け、
たまりにたまつた欲望を吐き出す。
びゅくびゅくと種子を膣内へと放出する
最高の感覚。

中で……
赤ちゃんできちやう……

どく
びゅく
びゅく



だめだ。。。まだ足りない。。。
もっと彼女を汚したい、手放したくない。

俺は彼女のスカートを剥ぎ取り、
床に仰向けになるよう押し倒した。



俺は倒れこんだ彼女の両腕を
がっしり掴み、まだ萎えないチ○コを
押し付ける。

まだ続くの……？

もっとこの穴で
気持ちよくなりたい、この
穴でチ○コをしごきたい……。

俺はその一心で、何の抵抗もしなくなった
彼女に腰を突き出した。



最初とは違い、愛液と精液が絡みつく膣内は、チ○コをとてどもスムーズに受け入れる。

もう……
はやく終わって……

理性のきかなくなった俺は感情のままに、うわ言のようた言葉を発するようになっていた。

はあ……
この穴っ
気持ちよすぎるっ

7707070し

完全に無抵抗な彼女の体を
オナホールのようにして
上下にゆさぶる。

俺が本能のままに
卑猥な言葉を発すると
少しだけ歪む表情が
より俺の興奮を誘った。

オナホみたい
に●コしごくの
たまんねえっ……



さっきまでの打ち付けけるような
ピストンではなく、ゆっくりと
膣内の形を確かめるように、亀頭を肉とダへと
擦り付ける。

彼女の吐息が荒くなるのを感じた。
完全に抵抗を諦めてもなお
性を肉棒で擦られつつけることで、
快感を得はじめてしまっているのか。



彼女の吐息にはやがて声
混ざりよりいやらしく俺の射精を
誘ってくる。

嫌なのに、どうしても
声が出てしまう。。。
そんな様子の彼女をもっと
感じさせたくなった俺は
激しく腰を打ち付け、また絶頂を
むかえた。





俺は自分の精液で汚れきったチ○コを引き抜き、彼女の回元へと腰を運ぶ。

むぐっ

アタ

ほら、
口で掃除して……

柔らかい唇が敏感な亀頭をやさしく吸い付いてくる。

びゅん

ひん ひん



閉じた口をこじ開けるように
チ○コをぶちこむ。
唾液と精液がぬるぬると絡みついてくる。

むぐう……っ

ずん、
ずん、

ううっ、
口小さくて狭いっ……!!

まだまだ射精したりない
俺は彼女の口も利用して
チ○コをしごき始めた。



喉までチ○コを押し込みたびに
嗚咽をもらしながら
回全体がチ○コを押し返してくる。

んぐっ
むぐううっ……

ずぶずぶずぶずぶ

ああっっ
口もよすぎて
また出そうだっ……!!

俺は入りきらなかった精液が
溢れてヒクヒクと痙攣する
マ○コをオカズにしなから、
回をずっぷずっぷと激しく
犯しまくる。






ふと冷静に戻った俺は
ポケットからスマホを取り出し、
精液まみれの姿を写真に納めた。



「誰かに言えば写真をばら撒く」
俺はありがちなセリフを吐いて
その場から急いで立ち去った。

彼女は黙って
コクリと弱々しく頷いた。





後日、彼女の肌の感触を忘れられないで
悶々としていた俺は、例の写真を使つて
彼女を深夜の公園の公衆便所に呼び出した。

ここなら誰にも邪魔されることはないだろう。

トイレの個室に連れ込み、早速服をはだけさせた。
俺に怯えて従順な彼女を乱暴に便器に
座らせ、足をおおきく開かせる。

ううっ……

ガガ

資料室でははつきりと見ることとはできなかつた
使い込まれていない綺麗な性器と乳首、
そして羞恥にゆがむ彼女の表情が
俺の興奮を誘った。

2本の指を割れ目にあてがい、マ○ヨの肉を遠慮なしにまじまじと観察する。

見られる緊張からか、入り口のヒダがヒクヒクと痙攣していきやらしい。

くぱぁ♡

大事なところ
じっくり
見られちゃってる……



俺は用意してきた玩具を取り出し、
開いた肉に押し込む。

見たことのないソレに
訝しげな表情の彼女を横目に、
スイツチを起動する。

ぴとっ



今まで感じたことのない
振動の刺激に体をよじらせる彼女に、
顔を近づけると、露わになった
おっぱいをまじまじと眺める。

この歳にしてはかなり発育がよく、
ぷっくりと半勃起した乳首が可愛い。

乳首、勃ってきてるぞ
見られて
感じてるのか？

ち、ちがいま……





彼女の言葉を遮るように、膨らんだ乳首を啜える。

初めて味わう、
これが女の子のおっぱいの味…。

ゴ
ッ
ッ

ちゅ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

俺はさらに強く、激しく
乳首に吸い付く。

乳首をコロコロと舌で転がすと、
じわじわと口のなかで
勃起し、かたくなって行くのを感じた。

ぢゅる

ぢゅるる!!

おっぱい、
赤ちゃんみ
ちゃっている
に吸われちゃ
っている...



じゆるじゆるとその味を楽しみ、
興奮しきった俺は唾液まみれのおっぱいを
手で押し寄せて、チ○コを押し付ける。
もっちりとした柔らかさと
しっとり湿った汗が亀頭に心地よく吸い付く。



両手でおっぱいを押し付けながら、
その隙間に肉棒を挿入する。
弾力のある肉感が押し返してくるのを
押しつけて奥へと突き出す。

はあはあ…
パイズリっ
やっつてみたかったんだよ

しゅ
しゅ
しゅ
しゅ
しゅ



ぎゅっとおっぱいをチ○コに押し付けながら
腰をふると、おっぱいにチ○コ全体を包まれて、
とても気持ちがいい
胸板に亀頭を擦り付けるようにすると、
肋骨に裏スツが強く刺激され、
射精感がつづのる。



彼女の顔めがけてザーメンを吐き出す。
どろどろと臭いそれは彼女の顔と
着て来させた制服をべっちよりと汚す。

俺は肉棒を引き抜き、
再びさつき押し込んだローターへと目を回せる。



く、臭い...
制服も汚れて...
どうしよう...

割れ目に挟み込まれたローターを
引き抜くと、そこは愛液で溢れ、
ねっとり白い糸をひいていた。

マ●コ、ぐっちより
濡れて糸引いて…
準備万端だな

ね ちよっ

引き抜かれる刺激で
彼女は体をよじらせて
男を誘うような甘い嗚咽をもらす。



完全にチ○コを受け入れる準備が
できたグチヨグチヨの肉穴に
亀頭をかるく押し込むと、
さっきのザーメンと愛液が絡み合っ
てくちゅくちゅと音を立てる。

ちゅっ
ちゅっ

おっぱいも
アソコもジンジンして…
今、おちん●ん入れられたら…

んっ

とるけきった肉壁は
チ○コを子宮口まで簡単に
受け入れた。

おっぱいも口も
いいけど、やっぱり
マ○コが最高だな……っ！

あ
れっ

じゅっ
ぶっ

悶える彼女の表情とは裏腹に、
ザーメンを受精したがるかのように、
ヒクヒクと肉ヒダが痙攣し、からみつき、
チ○コからザーメンを搾り取るうとしてくる。

腰を打ち付けけるたびに
大きな水音がぱちゅん、ぱちゅんと
たち、愛液がチ○コの周りで泡立つ。

彼女はたまらず、抑えきれなくなった
喘ぎ声を吐きはじめた。

調子に乗り切った俺はさらに彼女への
強要を増やす……

ぱちゅん
ぱちゅん
ぱちゅん
ぱちゅん





あつそんな……んっ
こと、無理……あんっ
れすっ……!!

はあはあっ
ザーメン、子宮に
種付けしてくださいって
おねだりしろっ!

ぱちゅ

ぱちゅ

ぱちゅ



そ、それだけはっ
んっああっ……

口答えするなっ！
あの写真、
ばら撒かれてもいいのか？

ぱちゅ

ぱちゅ

ぱちゅ

んっ
んっ
あっ

彼女を個室から出し、
公衆便所から引っ張り出そうとすると、
当然ほぼ丸裸の彼女は抵抗する。しかし、

「言うことが聞けないのか?」

と俺が凄むと、彼女はうつつむぎ、
俺に従った。



公衆便所の茂みに
彼女を押し倒し、腰をこももに
突き出させる。

溢れる愛液がてらてらと
街灯で照らされる。

こんなところで……
誰かに見られちゃう……

とろろ

肛門を指で弄りながら、
汗だくの尻を揉みしだく。

こうやって犬みたいにして
伏せてれば見えないって



そうだな・・・
今日からお前は性処理ペットだ
毎日、俺の相手をしてもらおうからな

そ、そんな・・・

ぬ

っ

グ
リ

グ
リ

し
し

し
し



あっ

従順になるまで
犯して躑けてやるっ！

ニャー ぶっ ぶっ...





喘ぎ声、
出ちやっってるぞ？

あ
あ
あ

ん
ん
ん

ケツ穴ほじられながら
ここ突かれるのが
好きなんだなっ！





おらっ
イけっ!!

ビッ
ッ

あ
ん

あ

ん
ん

な、何か...
きちやうっ...!!

絶頂をむかえ更にキツく
締め付けてくる膈内から
引き抜くと、精液と愛液の混ざり合った液が
糸を引く。

はあ

はあ

交尾を終えた俺の頭は、
明日からこのメスを
どう支配するかというこ
ばかりになってた。

ドロ

ク

ク

ク

翌日。
俺は思い切って彼女を
校舎裏に呼び出した。

言われた通り、放課後の人気がない
校舎裏に時間通りやってきた。

あの写真の効果は彼女には
絶大らしい。

また学校でなんて……
するならばやく
終わらせてください……

わかってるよ

諦めたような態度の彼女は
手早く行為をすませようとしたのか、
自分から服を脱ぎはじめた。



自分の指で開いて
見せてみろよ

ううっ……
これでいいですか……？

彼女は俺の指示に従い、ぷっくりした
2つの肉を指でおさえ、広げる。

本来もっとも女の子が隠さなければ
ならないところを目の前で
露出させる姿に、股間がじわじわと熱くなった。



ん……?
なんだもう濡れてるのか

そ、それは……

露出された恥部に2本の指を軽く挿入してみると、意外にもすでにそこはすこし湿り気を帯びていた。ぬるぬるとしたそれを使い、ゆっくりと指を奥へと送り込む。



オナニーはするの
か？
頻度はどれくらい？

しゅ、週に1回くらい……
パパとママが留守のときに……
あつ……んっ……!!

俺の不躰な質問にも素直に答える。
彼女の感じやすい性感帯は
オナニーで開発されたものようだ。





それでこんなになつたんだな
濡れやすい変態マ●コに

そ、そんなこと……
んんっ……!!

フツフツ
フツフツ
フツフツ

普段はどうやって
いじってるんだ？

うう……
この……上のところを
机の角にひっかけて……
擦り付けてます……っ



『ここ』じゃわかんねーよ！
ちゃんと言わなきゃ
痛くするって言ってるだろ！

痛っ…ごめんなさいっ！
おま●こですっ！
おま●このクリトリスいじって
オナニーしてるんですっ！

ずん



手淫でほぐれきったそこに
亀頭を押し付けると、腰を引き付けるように
膣肉が強く吸い付いてくる。

そろそろ入れるぞ
ほら足絡ませて

フ

リュ

はい……

もっと足くっつけて
そうそう……

放課後の校舎裏、
こんな状況だから、
なのだろうか？
彼女は、
艶のある声を
漏らし始める。

ん
ん
っ

あ
っ

ぐ
っ

い
っ

ム
ッ

ム
ッ

すぐに感じるようになったな
もしかしてこういうところですか？
好きなのか？

そ、そんなわけ……
ない……んっ……

又チャッ

又チャッ

又チャッ

これ、吸い付きやバ過ぎて……
すぐにでも出そうだった……

出すなら……出せば
いいじゃないですか……

ぐりゅ

ぐりゅ

ぐりゅ

ひ
ア

ア



なんだからその態度は？
なんなら誰か生徒が来るまで
してもいいんだぞ？

お、怒らせるつもりじゃ……
ごめんなさい……！

俺が凄むと、
彼女が震え、そのたびに
肉穴が収縮し、病みつきになるほどの
快楽を感じさせる。

ぐりゅ
ぐりゅ
ぐりゅ

ハイ
ハイ

許して欲しかったら
おマ●コに種付してくださいって
おねだりしてみろよ

うう……
お、おま……んこに……
た、たね……

ああ!?
聞こえねえよ!

わっ

あ

あ

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

お、おま●こにっ
種付けしてくださいっ!!

よーし
オラっ!
ご褒美だっ!

んんっ……!

あ

ん

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク





あああっ!

おおっ!
出るっ!

ツキッ
ツキッ
ツキッ



じゃ、
ここで四つん這い
になって

……
こう、ですか……？

あれからずっと、
彼女を呼び出しては溜まった
性欲処理をさせる関係が続いている。

写真で脅され、だんだん従順になる
彼女への行為は、校内にまで
及ぶようになった。

今日も体育の後の放課、
クラスの子の体操服姿に
ムラムラと溜まった性欲を
吐き出すため、体倉庫の物陰に呼び出した。



運動後のむれた肌からは
だらだらと汗がたれ、
甘美なおいを放っている。

体操着をまくり、スポーツブラを外せると、
ぐっしり濡れた汗が体操着に
染みて、うっすらと
2つのピンク色が浮かび上がる。





俺はブルマの端をつかみ、
重いっ引き上げる。
面積の少なくなった布から
肉がハミ出て、その奥のラインが
よりハッキリわかる。



あんっ……

食い込んだブルマをずらすと、
体液でぬっちよりした
秘部が露わになる。
俺も腰を降ろし、
ガチガチになった肉棒を
とりだしてそこに押し付ける。

クチャ

ズ

クチャ



もう濡れて
きてるな……

そ、それは……

熟れた割れ目にそって
肉棒をなぞるように
押し付ける。
するとすぐだ、
ニユルニユルとしたものが
亀頭からみつく。
既に濡れていたそこは、
肉棒を受け入れる準備が
できていた。



この淫乱がっ!

んっ

じゅ

ふっ

キュッ

ちがいつ...
んがいつ...
↓

すっ



ぱちゃっ

ぱちゃっ

ぱちゃっ

ぬっちよぬちよと
滑る肉はズツポリと
肉棒を最後まで啜え込む。

運動後の汗が大量に
混ざった愛液が、いつもより
ぬるぬるとローションのように
肉棒への摩擦を減らし、
膣内のヒゲやイボの感触を
ハッキリと感ぜさせる。



ぱん
が
ぱん

ぱん

ぱ
ち
ゃ

ぱ
ち
ゃ

ぱ
ち
ゃ

マ●コ……いつもより
グチヨグチヨにい付いて
ヤバいっ……!!

あの……っ
そろそろ次のっんっ
授業がっ……



ペットがご主人様に
急げっのか！
だっからお前が
腰振って搾り取れよ！

あっんっ……
わ、私が……？

ばん

ばん

ばちゃっ

ばちゃっ

ばちゃっ

俺はマットに寝そべり、
彼女に俺をまたがせ、自ら挿入させる。
腰を動かし始める彼女。俺は自由になった
腕で、体操服をまくりあげた。

い、言わないで……

おっぱいもマ●コも
丸見えだぞ？

マ
マ
マッ

彼女の膣内は淫語を使うたび、羞恥からか、キュンキュンと肉棒を締め付けてくる。

さらに、体重が乗った激しいピストンがずりずりと肉棒を絞り上げる。

汗だくマ●コ、そんな激しく腰ふられたらっ
ああっ……

この格好、奥まで届いちやうっ……

しゃぶしゃぶ

ぶっ

しゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

次の授業に間に合わせるため
彼女の腰振りにはさらに加速して
俺は限界を迎えそうになる。
俺の最後の要求に、
焦る彼女はしぶしぶ応えた。

うう……はやく
射精してください……!!

イってほしいなら
おねだりしろよ!

しゃぶしゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

しゃぶ

彼女にさらさらにいやらしく
射精のおねだりするように
命令する。

彼女は必死に羞恥心を
押し殺しながら言葉を探す。

もっといやらしい言葉で
行ってくれないと
いけないなあ……!

……もつと……?
……わ、わたしの……

ポ、ポ、

ポ、ポ、
ポ、ポ、
ポ、ポ、

私のおマ●コで……
ど、ドピュドピュっつっ
射精してくださいさいっ……!!

絞りはり出され、
俺は腰を浮かした彼女の声聞き、
腰を下から打ち付けた。

ばん

(ん)
(ん)
(ん)
(ん)

ばん

ばん

パチ

パチ

ああっ……
もう出るうっ!!



あんな
あんな
あんな
♡

オラッ
オラッ
オラッ
種付けだ!!

ド

ゴ

ユ

い!!

吐き出した精液は
ダラダラとマットに滴る。
結局その掃除のために
次の授業はサボることになった。

キーン
（ん）
（ん）

カーン
ゴーン
びびろ
ろっ

今日は水泳の授業だ。
この機会を逃すまいと、俺はあらかじめ
彼女に授業を抜け出すよう伝えておいた。

誰もいない更衣室で待つと
遅れていない彼女は現れた。



彼女の腕には、可愛らしい
黒の下着が抱えられていた。

もちろん、彼女の付けていたものではない。

あの、
下着持ってきました……

俺がクラスの委員長の下着を
女子更衣室から拝借してくるよつた
言っておいたのだ。
俺はその下着をさっそく「使う」こととした。



パンツで包めば
いいんですか……？

ああ、
それで扱いてくれ

肉棒が盗んだパンツに包まれる。
さっきまで女の子の肌を守っていたパンツが
いまは男の一番汚ところを包み込んでいる。
俺は目の前の水着片側だけずらした。

ニギッ

彼女がパンツを絡ませながら
優しく肉棒を扱き始める。
さっきの放課まで普通に話していた
委員長長のパンツが今、俺の肉棒を
刺激するための道具と化しているのだ。

委員長パンツコキ
よすぎるっ！

ゴキッ

ゴキッ

俺は本能にまかせて乳首にしやぶりつく。
チ●コを扱かれながら女の子の乳首に
吸い付くという最高のシチュエーションに胸が高鳴る。

じゅる

チュパッ

ゴクッ

ゴクッ



射しばかり扱かれると、すぐに
射精感が高まった。
このシチュエーションのおかげもあるが、
彼女が俺の気持ちいいところを
覚えて始めているらしい。

じゅる

チュパッ

ゴクッ

ゴクッ



もうすぐ授業も終わる。
俺は彼女を押し倒し、限界まで
膨れ上がった肉棒を押し付ける。

やっぱり射精すなら
こっちだなっ！

チユツ
フ

あんっ
またアソコに……

サ
リ



最初から激しく、打ち付けるように腰を打ち付ける。すでに俺のチ○コの形を覚えた。肉穴はみっちり締め付けてくる。

アソコじゃなくて
ま●こだろ！
エロ言葉でよがれって
教えたる！

ごめんなさい♡
おま●こ気持ちい
です……♡

あ
んっ



腰を振るたび、パンパンと
肉と肉が弾ける音が更衣室に
響く。

ここはドアから近く、
もし教師が来たら一発アウトの
位置だ。

やっぱりもうグチヨグチヨ
じゃねえか!
乳首吸われるのそんなに
よかったか!?

はっ
濡んは
めらっ
んす乳
んへ首
っンだ
なタイ
さいで
っっあ
っ♡



だが、あえて隠れず
堂々と通路の真ん中で交わる。

誰かに見られてしまうかも
しれないという状況。
そのほうが彼女の臆圧は
キュンキュンと強まるのだ。

そうだな
こんな場所で発情する
変態肉便器だっ！



俺はラストスパートをかけるように
さらに力強く腰を振る。

彼女はそれに合わせて
腰を動かし、自分の気持ちいところを
探りつつも俺のチ●コを射精へ導く。

やっぱりこの
マ●コ……最高だっ！

はいいい♡
ありがとうございます♡



だんだん彼女の腰振りが激しくなる。
もはや喘ぎ声を隠す様子すらない。

最近の彼女が性処理のときだけ
やや積極的になり始めていると思っ
俺の気のせいだろうか。

あああっ
もういきそっ……

わ、私もっ……



ガツチリと腰を抑え、
子宮へと届くよう亀頭を
奥へ奥へと押し込む。

ほら出るぞ
受け止めろっ！

俺は彼女をイカせるよう
いつも彼女が激しく吐息をもらす奥を
突き上げる。

あっ

はあっ

あんっ

あっ

ッ

ッ

ッ

ッ

ッ

ッ

確実に子宮に届くほど一番奥で、
精液をどぶどぶと吐き出す。

ほら出るぞ
受け止めろっ！

同時に達した彼女の膣は、
かなりのキツさでキュウキュウと痙攣を
起こし、根元から精液を搾り取った。

いつもより積極的に腰を振る
彼女ののおかげで強い充足感を感じる
セックスだった。

今日の性処理は
すごいよかったぞ……

ありがとうございます……♡

事後、帰り際の彼女は、なぜかいつもの
暗い表情を見せなかった。

ポタ
ポタ

とある休日。
今日は初めて、俺の部屋に
彼女を呼び出して、みることにした。
いつもの怪訝な顔をしながらも、
興味あるげに見ている。
少し興味ありげに見ている。



いつもなら、呼び出してすぐに
性欲を満たし、全く普通の会話が無いまま
お互い黙って別れる……

それが俺たちの関係だったはずが、なぜだか
今日は普通のことを話しかけてしまった。





し、私服、
可愛いね……

えっ

いつもなら、呼び出してすぐに
性欲を満たし、全く普通の会話が無のまま
お互い黙って別れる……

それが俺たちの関係だったはずが、なぜだか
今日は普通のことを話しかけてしまった。



ありがとう

お、おう……

彼女も、普通に言葉を返した。
いつもの敬語はなく、きつと彼女の本当の顔で。
なんだか恥ずかしくなった俺は
少し黙ってしまったが、次に声を出したのは
彼女だった。

それから小一時間、彼女と普通の
会話が続いた。学校のはなしとか、
家庭のこととか、なんでもない内容だった。
自分の部屋に女の子を誘って普通に
談笑して。。。これってまるで。。。



何を考えてるんだ俺は。

平静を装うように、俺はいつもの強気な態度で彼女に言葉を切り出した。そう、俺はこいつの飼い主……。俺がスイッチを入れると、彼女も察して表情を変える。



俺はベッドに彼女を押し倒し、腕をタオルでベッドの金具に縛りつけた。

よし、ちゃんと下着をつけずに来たんだな

はい……

大きく股を開かせると、命令しておいた通り、下着をつけず、隠さなければならぬところが無防備になっていた。



彼女は毎日のように続く俺の要求にも慣れて来たのだろうか、俺の卑猥な言葉に対し、

ノーパンで道歩くの、興奮したか？

は……はい……
ご主人様のために
お、おマ●コ濡らして
おきました……

ただたどしいながらもいやらしい言葉を選んで答えるようになっていた。従順だ。俺に犯され続け、彼女は精神的に俺に絶対服従になっていた。



俺は部屋に持って来ておいた
髭剃りとクリームを手元に置き、
それを彼女の秘部の周りに塗りたくる。

ご褒美に
トリミングしてやるよ

ベチョ

え……？

彼女は何かはじまるのかという
不安の声を漏らす。



髭剃りで彼女の肌を傷つけないよう
陰毛を剃り上げる。
俺が剃毛のためマ○コを
まじまじと見つめるからか、じわじわと
また愛液が垂れてくる。

ようやく何をされているか
理解した様子の彼女は、
悶えるような表情でさらに顔を赤くさせた。



綺麗に刺り上げたそこは
ぷにぷにの肉感がよりハッキリと伝わり、

ほら、綺麗に
なったぞ？

あ、ありがとうございます
ございます……♡

ヒクヒクと蠢く肉ヒダが俺の興奮を誘う。
俺は乱暴に彼女の服に手をかけた。

っる



服の紐を緩めて剥ぎ取る。
ほぼ生まれたままの姿になった彼女に
欲望をぶつけるべく、俺も
ズボンのチャックをおろし、肉棒を
綺麗になつた割れ目にふにふにと押し付ける。

もうグチョグチョだな
どうして欲しいんだ？

お、おチ●ポで……
おマ●コゴ、シゴシして
気持ちよくなってくださいっ

彼女とは何度も体を重ねているが、
こうやって体の動きを奪っている、
俺の劣情を刺激した。いつものより



覆いかぶさるようにチ○コを挿入する。
もう彼女は声を抑えることもなく
喘ぎ声をあげる。



くうっ!
いい具合になってるな!

意識したことはなかったが、
体の相性がいいのだからか、
いつものように彼女の肉壺は、俺のを奥まで
咥えこみ、ニユルニユルと全体を



程よい強さで締め付けてくる。
俺はその感触を確かめるように、
徐々に腰振りを速くさせる。



スカートも脱ぎ去り、彼女はさらに無防備な状態を晒す。俺は真剣な眼差しで彼女を見つめ、彼女の顔へと詰め寄った。

また性器を挿入しながら、俺は無意識のうちに彼女の唇を奪っていた。思えば、彼女と唇を重ねるのは初めてのことだ。

ぬ

ちゅっ

ぬ

ちゅっ

ぬ

ちゅっ

んっ

ちゅっ





小さな口に舌を侵入させ
彼女の舌に巻きつくように
口内を犯す。

この世のものとは思えないほど柔らかい
唇の感触を感じながら腰を揺らすのは
俺の征服欲を最大限に満たしてゆく。

ぬ

ちゅっ

ぬ

ちゅっ

ん
ん
ん

ちゅっ
ちゅっ
ぽっ

ぬ

ちゅっ

ちゅっ



多少の抵抗はされるものかと
思ったが、彼女は静かに目を閉じ
されるがままだ。

俺は唾液を吸い取るように
激しくデーパーキス続ける。
そのたび、腰の動きも自然と速くなった。



舌が性器になつたように気持ちいい。
膣と回、ふたつの粘膜をひたすら
擦り続ける。

俺は溢れる愛液も唾液も、すべてを
感じながら彼女を犯し続けた。

ぬ

ちゅっ

ぬ

ちゅっ

じゅる

じゅる
ぬ!!

ぬ

ちゅっ

じゅる



こうして唇を重ねると、
彼女の全てが愛おしく感じる。

セックスとはこんなに気持ちいいもの
だったのか。

俺は最高の快樂のなかで絶頂をむかえる。

こ、こ、こって
お庭……ですよね？

ガ
チャ

俺は彼女に目隠しをさせ、
庭へと繰り出した。

昔飼っていた犬の首輪を拾い上げ、
彼女の首へと通し、その鎖を
庭の鉄柵へと繋ぎ止める。

されるがままの彼女も、
さすがに戸惑いの声を漏らす。

そうだよ
この時間は通行人
少ないけど

ああんっ
何か・・・お尻に・・・

俺は買っておい
アナルトグツズをアナルへと
挿入する。

フサフサとした飾りの
ついたツレが奥まで挿入されると、
尻尾が生えたようになる。

お利口なペットに
ご褒美のプレゼントだよ

ズグツ



ちよつと用事思い出した…
戻るまでここで待っていてくれよ

2発も連続で射精し、
チ○コは少し萎えてしまっている。
それが回復するまでの間、
いわゆる『放置プレイ』というのを
試してみることにした。

ドアを閉める音を出して、
庭からいなくなつたと思わせる。

えっ
待つて…!!
まっ待つて…!!

だら
だら

彼女に自分がいることが
バレないよう、背後へと回り込む。

彼女が見られるかも
しれないという状況に興奮する気が
あるのは知っていたが、
この状況も例外でないようだ。

さっきまでのセックスの間に
流したものではない愛液が
どくどくと生産されている。

こんなところで……
外に人、いないよね……？

ぬりゃ...

これだけで快感を感じ始めているのだろうか、ぬりゅぬりゅとアナルからおもちゃがひり出され、結合部の球体が露出する。

おしりのモノがこすれてっ……うっ……

ねりゃりゃりゃ

だらう...

だらう

球体がひとつ、またひとつと吐き出されるたび、マ○コもヒクヒクと動き、愛液を吹き出す。そしてついに、限界を迎えたようだ。

なんでここになに...おしり、気持ちいいの...?!

ハア

ハア

おいおい
尻尾が抜けかけてるぞ？

俺は声をかけ、
抜けかけの尻尾を
さつきよりも深く押し込んだ。
俺の声を聞いた彼女は
安堵の声を漏らし、少し表情が緩んだ。

その声……！ずっと
いてくれたんですね！

ん

ん



こんな濡らして……
どうしてほしいか
言えるよな？

ガチガチに復活した
チ○コを、ほぐれきった
割れ目に押し付けて
挿入しないようにゆっくりと
擦り付けじらす。

目隠しをはずした彼女も
もう完全にその気表情だ。

はい……アソコが……
おま●こがせつなくて……
はやくおち●ちんくださいっ





ああん♡
おち●ちんきたあ♡

ほら、これが欲しかったんだろ！
街のみんなに見てもらおうな！

だめえ！
見られるの……らめえっ！

あ、ん、
あ、あ、ん、

ら、こうすると
周りからよく見えるぞ？

あ
こ、こんな
格好で……

彼女の太ももを
がっしりと掴んで持ち上げると、
無防備に股を開く姿が
庭の向かいの通路から丸見えの
状態になる。





本当は嬉しいんだろ！
ちゃんと言えないとお
お仕置きだぞ！

は、はい！
気持ちいい、です！
お外です！
気持ちいいの！

キュッ
グッ

キュッ
グッ

キュッ
グッ



ください!
変態おま●こに
種付けご褒美ください♡

くう、隠れてするときより
締まりすぎて…
もう、イクぞっ!

ジュポッ

ジュポッ



あああ
イクううう!!

おうっ!!
出るぞう!!

ト

ク
ン

ビビ!

ビビ!



その後も何度も、
お互いの若い肉欲のままに
俺たちは体を重ねた。

この関係がいつまで続くのだろうか。
そんなことはどうでもよかった。

今ある欲望を俺は吐き出し、
彼女はそれを受け入れた。





明日は何をして寝ようか。

7th Eo ♡

fin.



乱暴にされたくなかったら
大人しくしろよ……

やりますから……
もう帰らせてください

俺はいきり勃った肉
彼女の尻の谷間に挿れ
脅しの言葉をかけた

2人だけの密室… あるキツカケで触れてしまった 女の子の柔肌に発情し…

オナホみたいのに
チ●コしごくの……
たまんねえっ……

俺が本能のままに
淫靡な言葉を発すると
したまは正か表情が
なり俺の興奮を認めた

完全な無抵抗な彼女の姿を
オナホのようにして
上下に揺らす

**精根尽き果てても
容赦無くそのまま連続射精!**

フッポ
フッポ



「お前さんの胸を指で揉んで、お前さんの乳首を指で刺す。お前さんの乳首を指で刺す。お前さんの乳首を指で刺す。」

そして始まった脅して呼び出して性処理の日々…!



自分の指で開いて見せてみるよ

うっっ…
これでいいですか…

彼女は何の指も作らぬ。お前さんの乳首を指で刺す。お前さんの乳首を指で刺す。お前さんの乳首を指で刺す。



そうだな…
今日からお前は性処理ベツトだ
毎日俺の相手をしてもらうからな

ぬ 変態的な要求にも逆らえない!

そ、そんな…



許して欲しかったら
おマ●コに種付してくださいって
おねだりしてみろよ

うっっ…
お前さん…
ただね…

ああ!?
聞こえねえ



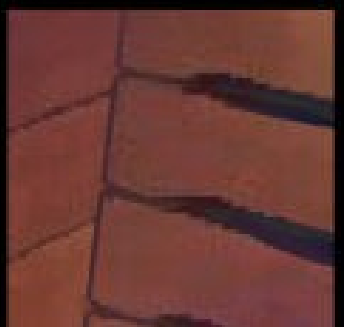
あの、
下着持ってきました...

盗ませたクラスメイトの
下着で...



要求はエスカレート！
授業を抜け出し...

濡れ透け体操着H！



授乳パンツコキ！？





体を重ねる日々、次第に男を受け入れはじめる...?

深夜の庭に全裸放置!

